三造の死生徘徊

――「北方行」から「狼疾記」へ――

種　茗

はじめに

「北方行」は中島敦没後の一九四八年五月に「表現」第二号春季号（角川書店）に発表された未完の長編小説である。第四章の末尾に「三五・八・十九」という日付から一九三五年がまだ「北方行」創作途中であることがわかるが、二〇〇一年全集の解題で明らかにされたように、「大学在学中からのものと推定される『ノート第二』」に書かれた「北方行」の下書きと、一九三三年の手帳に伝吉の手記が書かれたことと、一九三六年六月書簡の「小説を書いてゐる」、「北方行」に基づいて書かれた短篇「狼疾記」原稿末尾に「昭十一・十一・十」が「昭十二」、「昭十一」に二回直されて最終的に抹消されたことから見ると、「北方行」が一九三三年から一九三六年[1]（一九三七年?）まで書き続けられた可能性が大きい。

現存の部分は五章あり、第一章では「人間的真実」を追求するために日本から天津へ渡航していた黒木三造が描かれ、第二章では、中国に嫁いだ三造の従姉・白夫人の国籍混乱や娘・英美の言語混乱が書かれている。第三章では折毛伝吉が登場し、稲妻の中で上海で過ごした時間を思い出す。第四章では、宴会に参加する三造と伝吉が白夫人の紹介で知り合うことや、当時の中国情勢に対する青年たちの討論などが書かれ、第五章では伝吉と三造との対談が行われる。

先行研究において、濱川勝彦は作品の主題について「三造の存在論的不安の、実践的脱皮を意図した」[2]と指摘している。奥野政元は「特定の場に置かれた自己が、如何にその場を受容するかの問題」[3]を提示し、川村湊は「三造を、そうした人々の渦の中に投げ込み、そこからいかに彼が『現実』の世界や、事実や事物をどのように掴んでくるのかを、文学的な実験として試みようとした」[4]という観点を述べている。本論では、まず先行研究における自己と現実という角度を踏まえ、三造と伝吉の思想の源を探ろうとする。

年譜[5]によると、一九三五年に中島敦が「同僚数名とパスカル『パンセ』の講読会をもつ」という記録が残っている。それに、一九三七年の中島敦の手帳には、二月二〇日に「Pascal Pensée 到着、勉強セネバナラヌ」、九月二日に「Pascal ; 'Epictetus et Montaigne. 頗る明快」、九月一〇日に「戦争ハ何時迄続クカ、／パスカルヲ想起ス、／ピレネーの南の徳は、ピレネーの北の罪、云々――」、九月一七日に「'Pascal. Huxley 読了」と、一九三八年八月九日の手帳に「パスカル訳了」という記録が残っている。また、「北方行」の草稿が綴られた作者の「ノート　第一」にも「A・Huxley」が書かれた。これらの記録から、パスカルとハックスレイに対する中島の深い関心が窺える。

パスカルとハックスレイの受容について、橋本忠広は中島敦の中学

時代からの英文学に対する興味、大学時代に聴講した英文学の講義などの中島敦の英文学に対する関心を提示し、また、一九三七年中島が購入したパスカルの『パンセ』がハックスレイの「パスカル」を翻訳するためのものである[6]と指摘している。その継続として、橋本は中島敦の「北方行」とハックスレイの『対位法』との関係を論証し、「中島は『対位法』を下敷きにして「北方行」を執筆した[7]」と結論をまとめている。本田孔明は「北方行」を「〈神〉を拒否しつつ絶対を求める伝吉に、抽象的思考による現実からの乖離を『生命礼賛者としての人間』という立場で克服しようとする三造を対決させる試み」と解読し、また「それが中島固有の問題意識ではないこと」を「『パスカル』という先行テクスト」を見て明かになったこと[8]を提示している。本論では、一九三八年に中島敦に訳了されたハックスレイの「パスカル」ともっと早く中島敦に読まれたパスカルの『パンセ』という二作における観点の差異と、それぞれが「北方行」の創作に与えた影響について分析していきたい。特に『パンセ』をハックスレイの「パスカル」に批判される対象として読むのではなく、パスカルの哲学の本質と前提を考察する必要がある。また、「北方行」以前の〈三造もの〉における中島の固有の問題とパスカル、ハックスレイの哲学との関係性を分析する必要がある。本論では、『パンセ』と「ハックスレイ」の二作と「北方行」の主人公・三造と伝吉の人物形象との関係を考察し、〈三造もの〉における「北方行」の特徴をまとめ、その後の「狼疾記」に与える影響を明らかにしたい。

一、伝吉と『パンセ』

伝吉の恐怖と不安は小学校の教師から聞いた人類絶滅説から来ている。「人類が無くなつたあとの無意義な真暗な無限の時の流れを想像して、その恐ろしさに堪へられ」ない伝吉は生きる希望を失ってしまった。その状態で、伝吉は「上海から北京への全くあてのなかつた漂泊」を続けた。伝吉に不安と恐怖を感じさせる人類絶滅説の源を探るために、中島敦が「北方行」を創作した時期に読んだ『パンセ』における宇宙観を見る必要がある。

『パンセ』において、宇宙の二つの極限が挙げられている。

> 宇宙を照らすための永遠の灯火のように置かれているあの輝かしい光に目を注ぎ、この天体の描く広大な軌道にくらべては、この地球も一点のように見え、さらにこの広大な軌道それ自体といえども、天空をめぐるもろもろの天体がとりまいている軌道にくらべては、ごく微細な一尖端にすぎないということに驚くがいい。（中略）人間にいま一つの驚くべき不可思議を見せるために、人間は自分の知っているもののなかで最も微小なものをさがしてくるがいい。[9]

最も広大な宇宙と最も微細なものを認識しきれない人間はこのような無限大と無限小の間に彷徨い、自分自身を失ってしまうとパスカルは言っている。『パンセ』における理論もこの基調から展開されている。そのうえ、「万物は虚無から発し、無限へむかって運ばれていく。このような驚くべき運行を、だれがたどって行けるであろうか？これらの驚異を創造した者は、それを知っている。その他の者はだれも知らない」という虚無と無限との二つの深淵が提示されている。

そして、『パンセ』における人間に対する認識も右記のような「虚無」と「無限」に基づき、もし母親が殺されると今の私がいないのを

例にして、「私は必然的存在ではない」、また、「私は永遠でも、無限でもない」ことを示している。しかし、その一方で、「自然のうちに、永遠にして無限なる必然的存在がある、ということを私は知っている」という神の存在を認めている。神以外の人は「天使でもなければ禽獣でもない」、常に「中間」にいる。そして、パスカルは人間の自愛という悪習慣を批判し、自愛がすべての秩序を乱す源だと言っている。

上記のパスカルの理論に対し、「北方行」における伝吉が「人類や地球に対する不信」を抱き、「今ある如く、あらねばならぬ理由（必然性）が何処にあるか」を探ろうとし、「世界はまあ何といふ偶然的な假象の集まりなのだ」と感嘆するのはパスカルの理論から影響を受けたと言えるのだろうが、しかし、パスカルが主張している神への帰依は伝吉に受け止められない。それが「北方行」における中島の独自性だと考えられる。

世のすべてはこれ悉く神の設けた穽、神の嗜虐性を満足させる所の巧妙極るからくりではないか。恐怖におののきながら何の術もなく、あはれな人間共はそのわなに頸をしめられ、きずつけられ、次の穽の豫想におびえつつ、神の満足の微笑に見まもられながら、闇黒の墓穴へと送られて行く。（中略）此の、神の我儘な嗜虐性の恐ろしさの前には、無にひとしい個人の憤激も、それによつて生じさせられた狂気も暴行も自棄も何の意味もない。

人の原罪が神の設けた罠だと考えている伝吉は「神の嗜虐性」（人間が「無にひとしい」）のため、神に反逆することができないまま、神という大きな存在の前に屈服するしかないと訴える。伝吉が言っている神とは、まさに上述した広大な宇宙のような、人間がどうしても認識しきれない、予想できない存在であり、その前にいる人間はとても力弱くて小さいものである。『パンセ』において、パスカルは人間の不安定な位置を指摘したうえで、神に帰依することを解決策として提示しているが、伝吉にとって神が意地悪な存在であるため、伝吉は神に帰依しようとしないだろう。それは伝吉がすべてのことに対して「無感動」になる原因でもあろう。

極く幼い頃から、彼は「あらゆる事を知り悉したい」欲望と、「出来る限り多くの事物が自分の理解の彼方にあればいい」といふ、（中略）前者は誰にでもある、「自分を神にしたい欲望」だつたが、後者は、「此の世界を、絶対的信頼に値する確固たるものと信じたい」といふ、その逆の、つまり、此の宇宙の不確かさ、あはれさ、に対する彼の恐怖から生れた強い希求であつた。

人類絶滅説を信じる伝吉は、「此の宇宙の不確かさ」と自己の不安定な位置をよく知っている。「自分を神にしたい」という願望が実現できないため、「絶対的信頼に値する確固たるもの」を探すという唯一の道が残っているが、その「確固たるもの」が容易に見つからない。

伝吉は「中流家庭の善良な、但し母親を知らぬ少年。中学校の秀才。人生観上の幼稚な疑惑。継母。出奔。支那に渡つてゐた伯父の庇護。同文書院の怠け学生。漁色。退校。伯父との争ひ。又しても生活のための功利的な漁色。上海から北京への全くあてのなかつた漂泊」を経て、「更に現在、その白夫人（中国に嫁いだ三造の従妹、伝吉の愛人）と、又、その娘の麗美との交渉を顧みても何等の羞恥の念も起ら

ない程の」「モラルなんぞ所有してゐなかつた」人であり、「彼にはもつと切迫した希求」（上記の二つの願望）――に「追い詰められ」ている。それは「小さな者の恐怖から生れた棄鉢的に強い」希求である。

伝吉は日本領事館の役員と酒を飲んで下宿に帰る途中に、北京の暗い街で倒れていた。このシーンにおける伝吉の意識錯乱について、草稿には作者の推敲が見られる。最初に「七八年前の東京」と書かれたが、それが削除され、「一年」前の「上海」だと書き換えられている。つまり、酒に酔い、北京を東京だと思い込んだことが、一年前の「上海」を思い出すことに変更された。そして、「東京」が書かれた節には、「死ぬ時期が近づいたので故郷を思出す」の一句も削除された。つまり、最初の作家の発想は伝吉がもうすぐ死ぬため、故郷の東京を思い出すという設定であった。そして、伝吉の死について、すべてのものに「無感動」の伝吉が自ら命を断つ可能性が大きかったろう。なぜ「上海」に変えたかについて、その後の稲妻の中での伝吉の妄想から原因が窺える。

一回目の稲妻の中で、伝吉は上海で同棲した美代子と彼女の連れ子・清のことを思い出した。伝吉は美代子という「弱い者いぢめをする」「快感」を味わっていたが、子供の清に対して「自分でも不思議に思つた」「愛情」を持っていた。それは「子供の純粋」を愛する感情であり、清「だけは彼を寂然とした孤独の世界から救つてくれる唯一つのものであるかのやうに見えた」。ここで注意すべきことは二点ある。

一つは清に対する伝吉の愛情である。削除された伝吉の死のかわりに、子供の清の死が描かれるようになった。清には伝吉に愛されるべきものを二つ持っていると考えられる。一つは「子供」であること、もう一つは「純粋」さであろう。子供の清はまだ伝吉のように人類絶滅説に脅かされる「小さな者」ではなく、新生児として無限な可能性と希望を代表しているのであろう。つまり、伝吉はいつも絶滅などの死の世界から出発して物事を考えるのに対し、子供の清は無限な希望を抱いている生を意味しているということである。もう一つは「人類や地球に対する不信」を持っている伝吉とは違い、清は宇宙観、人生観などの外界の概念に汚染されていない「純粋」さを持っている。その「純粋」さのため、清は伝吉のような「無感動」の生活とは正反対に、安んじて自己の居場所にいられるのである。それゆえ、清が死んだときに、伝吉が号泣したのであろう。

もう一つ注目すべき点は伝吉が自分より弱い美代子をいじめて「快感」を感じたことである。人類絶滅説で恐怖と不安を感じていた伝吉は宇宙或いは運命の前では「小さな者」であるが、美代子みたいな自分よりさらに弱い存在に遭遇すると、まるで「神の嗜虐性」に憑かれたように美代子をいじめていた。そして、二回目の稲妻の中で、伝吉は「大地震や大噴火や大海嘯がおこつて、みんな目茶々々になつて了へ。（中略）自分の知つている人間はみんな惨らしい死方をするがいい」、「白夫人を殺すやうになるかも知れんぞ」などの「凶暴な」ことを想像し、それによって、「行為への熱情を自分の生活に注ぎこまう」としていた。つまり、「無感動」の日々を生きて行くために、伝吉には強い刺激が必要であろう。それで、弱いものをいじめたり、殺そうとしたりしたのであろう。しかし、伝吉の「惨虐な想像」は身近な弱い女性を対象にしただけで、作品に描かれた一九三〇年代の中国内戦の大きな時代の前では「冒険的熱情」を持たずに、三造に鄭州（当時の中国内戦の戦場）に行くことを勧めたのである。つまり、伝吉は人類絶滅説という死の理論を以て自己の人生観を築いた。その人生観で築かれた「小さな者」の閉鎖的な空間の中で伝吉の熱情を呼び起こそ

うとしたいのならば、同じく身近の弱い人をいじめ、自分が絶対的な強者になるふりをしなければならない。そうでないと、「無にひとしい」個人として、伝吉は生きていけなくなり、結局は予言された死の世界へと向かっていくしかないのであろう。

二回目の稲妻の中での伝吉の妄想はいずれも自分が感じた絶望と恐怖から生じたものであり、そして、伝吉の死という削除された内容のかわりに書かれた清の死と美代子をいじめた「快感」は、伝吉の死と同質なものであろう。なぜなら、無限な可能性と生の希望を持っている清が死に、美代子をいじめた後に二人が分かれ、白夫人を殺そうとしたが、結局妄想にとどまったことは、伝吉が自分の生への熱情のために色々思索、努力したように見えるが、結局すべてが死によって終結されているからである。つまり、伝吉の世界は絶滅のような死の世界へと向かっているが、その自分を救うために、清を愛したり、自分より弱いものをいじめたりした。しかし、結局生への熱情を呼び起こすことができず、死の世界へと向かうしかなくなるのである。伝吉はこのように、死から死へという無限な悪循環に陥った。そして、それは伝吉が作品の時代背景とあまり関係しない原因でもあろう。

二、三造と「パスカル」

中島敦は一九三八年に「パスカル」を訳了した。ハックスレイはパスカルの理論に反対し、「生命礼賛者」としての生き方を勧めている。まず、彼はパスカルの宇宙観を批判している。

分類上、我々は、全実在を、物質と、精神と、それから最後に、慈悲・神寵・超自然・神（或ひは、パスカルの段階の第三のものに、諸君の与へようとする、他のどんな名称でも結構だが）とに分けることが出来る。が、我々は之等の、便宜上の抽象物に現実性を付与しないやうに注意せねばならぬ。（中略）「現実」とは何であるか？「通常」とは？「常識」とは？又、「思惟の法則」とか、「知り得べきものの限界」とかは、何であるか？要するに其等は、多少とも、久しい以前に建てられた慣習に過ぎないのだ。（中略）無限小と無限大に就いての瞑想、又、肉体と精神との間の無限の距離や、更に限りも無く無限な・精神と「神の愛」との距離に就いての、彼の凡ての思索は、死によつて吹込まれたものであり、彼の「死の意識」の論理化であつた。

パスカルの宇宙観と人間観に対し、ハックスレイはそれが「便宜上の抽象物」であり、「現実性を付与しないやうに注意せねばならぬ」と強調している。また人間の目の前の現実は「久しい以前に建てられた慣習に過ぎない」とその本質を突き詰め、パスカルの死から出発している理論を批判している。パスカルの理論は無限と虚無を前提として成立するのであり、人間が世界を認識しきる能力を持っていないということを前提としている。しかし、パスカルが主張している「死の神」に対し、ハックスレイはそれが「生の神」だと言っている。つまり、ハックスレイは、神が人間を「励まし助けんとして手を伸べ給ふ」神であり、「『凍結せる単一』の神ではなくて、雑駁なる多様を包含する神」という「生の神」であると主張している。

「凡てが不変であり　何物も落つることなき地よ！」この言葉はパスカルのものではあるが、之は、古来の・殆ど普遍的といつていい・一つの憧憬――迷ひ苦しめる人類の・すべての神、善、

すべての真と美、あらゆる正義、天啓、唯一者、道義、を生み出した・あの憧憬を表してゐる。といふのは、絶対者なるものが、余りにも人間的なものから生れてゐるからである。疲労と困疲、惨めさと無常感、確固たるものへの希求、道徳的正当化への欲求、之等のものから絶対者は生れたのだ。

神について、ハックスレイは「疲労と困疲、惨めさと無常感、確固たるものへの希求、道徳的正当化への欲求、之等のものから」生まれたと提示し、神々が人間の作った人工的な概念であり、「近代主義（モダニズム）と呼ばれ」ている「昔の神々を抽象的実在と置換へることが」進歩だとは言えないことを指摘している。

生きてゐる人間は、多様以外の何ものでもない。併し、人間の矜持といふもののために、――組織と固定とを愛する知的悪風や、生命に対する恐怖・嫌悪のために、大多数の人間は、この事実をそのまま受入れようとしない。

パスカルは、人間が、終始一貫して基督教徒たることによつて、自らを人間性以上に昂める――或ひは、それ以下に低くする――べきことを求めた。彼は、人々が其の複雑多岐な本質を否定することを望み、彼等が自らの上に一つの統一を――彼（パスカル）の統一を置かんことを求めたのである。

人間に対し、ハックスレイは人間の「多様」性を認め、人間を人間以上か人間以下に統一すべきだと主張しているパスカルを批判している。しかし、「知的悪風」や「生命に対する恐怖・嫌悪」のため、自らの多様性を認めようとしない人間の短所が同時に指摘されている。それは「北方行」における三造の問題と同質なものだと言えよう。

此の半年程の間、彼は彼が今迄何年かかかつて自分の中に造り上げ、書き上げた様々の芸術家達の肖像を、あるひは打毀し、あるひは壁から取外すことに努めてゐた。何かはげしいもの、強いもの、凶暴なもの、嵐のやうなものに、彼はぐつとぶつつかつて行きたいのである。さうすることによつて、自分の身にくつついて、自分を不具者にしてゐる殻を叩きつぶしたいのである。

「今迄生きて行く真似ばかりしてゐ」て「直接に生きたことはない」三造が面している問題は如何に現在を生きるかということであるが、三造はそれまでの生き方による「生活の惰性」を捨て、今迄触れて来た芸術家達の影響をも捨てようと、「自分の魂の地質時代の埋没物をほり出」そうとしている。しかし、彼はいろんな難関に臨んでいる。それは「自己分析の過剰。行為への怯懦」、「人間認識の限界」、「人間の自由意志の否定」などの個人能力の微小さや、自分の生活の中に欠けている「生に対する感激」である。

しかし、ハックスレイの理論とは違うところは三造の難題の一つとして、「物に動じない事を以て修養の要諦とした東洋的教育の残滓」と「繁瑣な形式的な自己教育の結果」によって、感情が反覆しているということである。それは三造と英国人のトムソンについての東洋・西洋の対比描写からも窺える。もう一つの三造の独特な特徴として、三造が日本から天津に渡る船で「感じたやうな亢奮も焦燥も」北京で暮らしてから「樹木の中に埋れた古都の雰囲気に包まれ」、「いつの間にかどこか気持の底の方に沈殿して了ひ、それに代つて快い懶さが浮上つてくる」というような北京の雰囲気に癒された三造像が挙げられ

る。しかも、それは西洋ではなく、東洋の情緒に慰められたのである。

三、三造と伝吉

「北方行」の第一章では三造が描かれ、伝吉が第三章になってはじめて登場する。そして現存の最終章では、三造が伝吉に「『生への熱情』を吹込んでやりたい」と思い、伝吉が三造に鄭州へ行くことを勧める。つまり、「北方行」では、先に三造の生の問題が提示され、その後に伝吉の死の循環が書かれている。しかし、伝吉が人類絶滅の「科学の根柢を、更に」人間の「悟性乃至知性まで疑」わずにそのままで受け取るため、死から死へとの循環が続いていく。それは文中の最後に三造が批判しているように、伝吉が人類絶滅説を一度も疑ったことがないからである。

まとめてみると、伝吉の人物像には『パンセ』における宇宙観と人間観の影響が見られる。宇宙も人間も「不確か」な存在だ言っているパスカルの言説は伝吉の小学校のときに聞いた人類絶滅説として援用され、伝吉の根本的な生の基礎を押しつぶす。しかし、パスカルの言説以外に、中島の独自性と言える部分は伝吉の「小さな者」としての自覚である。つまり、宇宙と人間の「不確かさ」という基礎のうえに、中島は強者と弱者との対比構図を加えている。それは「神の嗜虐性」の前の無力な人間、より強い伝吉と彼にいじめられた美代子のような構図を指している。

そして、伝吉が生のために探しているのは「絶対的信頼に値する確固たるもの」である。つまり絶対的な、大きな存在が伝吉に求められている。しかし、探している中に、文学も享楽もそのような存在になれないため、伝吉がだんだん絶望してすべてのものに対して「無感動」になったが、弱い美代子をいじめて、自分が「小さな者」から「大きな」強い存在になれたような勘違いで生きて行こうとしたのであろう。但し、それは一時的な救済であり、いつか破綻になる。それで、伝吉は上海から北京へと漂泊して「無感動」の日々を送りつづける。また、パスカルの無限の死の言説に対し、中島は伝吉の死を通して死を具現化しようとしていたのであろう。そして、伝吉の死、清の死、白夫人に対する殺意のような死の描写だけでなく、死を描く中に、生の可能性を見出そうとしているのであろう。子供の純粋さを持っている清に対する伝吉の愛情がその一例であるが、最後には清の死によって生の無限な可能性が否定され、伝吉の生への希求は失敗に終わった。それに対し、パスカルの理論を批判しているハックスレイが提起した「生命礼賛者」という生き方が三造の人物形象の中に織り込まれ、死を代表している伝吉と対比的に、三造が現実と握手して生活への熱情を取り戻そうしている生の形象として造形された。

四、伝吉の行方

三造は伝吉の勧めで鄭州に行くことになるが、伝吉の結末が言及されずに小説が未完のままで終わっている。そして、中国内戦の情勢が多く書かれた文中において、伝吉はただ傍で見ていたのである。

> 電車通りへ出ると、路の両側に、垣根のやうに群集が立並んでゐる。長身の権が背伸して人垣の上から覗かうとしたとき、前の群集の一角が崩れて後退した。灰色の軍服を着た少年のやうな兵卒が一番前の老人を棍棒で叩きのめしてゐる。老人は泣号んで倒

れた。群集が騒ぎ出した。七八人の兵士がバラバラと駆けて来て人々の前に銃剣を擬した。人々はガヤガヤいひながら逃出した。そのざわめきの中に方々から「閻錫山、閻錫山」といふ声が聞えた。

「閻錫山が北平に来るんだよ。今夜。」と権がふりかへて伝吉に言つた。

「さうらしいね。その警戒なんだな。」

「とにかくこれぢや当分通れないぜ、通らうとするとあの通り擲られちまふ。」

「公使館区域でも抜けて行くより仕方がないな。向ふへ出た所で又止められるかも知れないが。」

このシーンは第四章において白夫人が設けた三造の歓迎会に出席した伝吉と朝鮮青年・権が並んで街に出て遭遇した閻錫山を北京に迎えるための非常警戒を描いた。

突然群集の中から白衣にハンティングを着けた男が躍り出したかと思ふと、矢庭にピストルを持つた手を伸ばして前の車をめがけて引金を引いた。（中略）一瞬間、群集は呆然として、此の事件を眺めた。が、次の瞬間に、警官達は本能的に此の暴漢のまはりに馳せつけた。（中略）彼の腕を捕へて居た趙教英はとてもその眼付きに堪へられなかつた。その犯人の眼は明らかにものを言つて居るのだ。教英は日頃感じて居る、あの圧迫感が二十倍の重みで、自分を押しつけるのを感じた。

これは一九二九年に発表された中島敦の習作時代の作品「巡査の居る風景――一九二三年の一つのスケッチ――」において、主人公の趙が朝鮮人の暴漢を捕まえ、戦争を経験している朝鮮民族から感じた圧迫感が強まったシーンである。「北方行」における伝吉と情勢との関係と比べて見ると、早年の中島の作品における人物と戦争などの時代背景と緊密につながり、背景の中に動いた人物が描かれたが、「北方行」に至って、伝吉も権も中国の内戦を傍で見ていただけで、それが道を通る障碍のために遠回りしようとするほどの無関心な態度を持っていた。つまり、背景に動く人物の設定から、背景と距離を置く人物の設定まで、作家の時勢に対する参加度が減り、時勢に対してむしろ傍観する立場を取っている。

内戦を経歴している北京という背景について、橋本正志は「登場人物たちの言語の問題を媒介にして、その過酷な動乱の時代を生き抜く人間たちの〈抵抗〉として自己存在のあり方を際立たせるための場所として表象された」[10]と指摘している。主人公の伝吉にかぎって言うと、その背景が「空しく廻るばかりであ」[11]り、伝吉の問題を解決させる外的な条件が設けられていないのであろう。それに対して、三造の生の問題にはまだ解決策がありそうに見え、それは文末に示された鄭州に行くことである。

「北方行」が未完のままで終わった原因について、菅野昭正は「肥大しすぎた作者の『私』は客観性を弱める違和物となり、それを内側から崩す自壊の要素として作用する」[12]という内的原因を指摘し、渡辺ルリは「物語上でも深く関わりあう北平の人物を日本で執筆することは困難を極めた」[13]という外的原因を推察しているが、伝吉と他人との距離、現実との距離を測ってみると、伝吉の未来がむしろ死に向かうしかないだろう。なぜなら、「小さな者」として、宇宙の広大さや絶対的な死の運命に面する伝吉はその概念的な死のために命を絶つ可能

性が大きいからである。もし伝吉に救い道があるとすれば、それは「形而上学的」な死を人間的な死のレベルの問題に引き下ろし、自らの死に具現してそれに面するしかないのであろう。つまり、「北方行」における背景と人物との関係が薄い伝吉の発展が断たれ、三造にはまだ鄭州に行く可能性が残っているということであろう。

また、パスカルとハックスレイの理論が中島に受け止められ、作品の人物像に賦与されたのは、作家の実体験とは密接な関係があると考えられる。パスカルの理論の底にある死に対する恐怖はまさに中島の一九二八年（一九歳）からの喘息の発作とつながっている。そして、「北方行」創作中の一九三四年に「命を危ぶまれる程の喘息の発作がある」[14]という記録から中島敦の病弱、また、伝吉のように執拗に死の理論に拘る理由が窺えるのであろう。そして、伝吉の人類絶滅に対する恐怖は作家自身の病弱だけではなく、「小さな者」である劣等感にも通底しているのであろう。このような身体乃至精神に対する劣等感はさらに早く書かれた「プウルの傍で」には叙述されている。また、三造の生についての探求において、今迄触れて来た東洋精神が形式主義的な教育であり、彼の自由を奪うものだとされているが、このような東洋精神に対する批判は「斗南先生」にすでに見られている。そこで、中島敦固有の問題とパスカル、ハックスレイの理論が相まって、新たな三造像が作られた。

五、統合された伝吉と三造

同じ「三造」を主人公とする作品「狼疾記」では、「北方行」における伝吉の内容が多く援用されている。特に、小学校に聞いた人類絶滅説とそのために常に感じた恐怖と不安などの感情もそのまま「狼疾記」に運ばれてくる。「北方行」の三造と伝吉と「狼疾記」の三造の問題点を整理すると、「北方行」における伝吉の必然性の理由を探す癖、小学校の教師から聞いた人類絶滅説、「北方行」の三造が瘤の男を見て考えた「人間の自由意志の働き得る範囲の狭さ（或ひは無さ）」が「狼疾記」の三造に受け継がれ、「狼疾記」の三造の主な問題点となる。その一方で、新しい問題も提出されている。それは、三造の生活の底流の「小さな響きがパスカル風な伴奏」と、三造が自己の「形而上学的」な「不安が他のあらゆる問題に先行するといふ事実」を意識したことと、二章から描かれた三造の不安と現実生活との関係上の問題である。

一章に描かれた三造の不安は今迄の「北方行」と違うところは、「狼疾記」における三造が「頭の中だけで造り上げられた少年の虚無観に、今や、実際の身辺の観察から来た直接な無常観が加はつて来た」と、伝吉の不安を根本的に疑って、現在の問題を新たに認識できたことである。つまり、「北方行」で三造に批判された伝吉の人類絶滅説に対する迷信という問題が「狼疾記」で見直されたのである。そして、「狼疾記」の三造のもう一つの進歩は、死という問題を更に具現化したことであり、伝吉が迷信した人類絶滅という「抽象的な死」が「狼疾記」では三造自身の病弱の身と死という「直接的な死」に転換されている。すなわち、「北方行」の死に関する問題が抽象化された死であり、それに対して伝吉の考えも抽象的であり、彼の生活と遠く離れているが、「狼疾記」では、三造の「喘息と胃弱と蓄膿とに絶えず苦しまされてゐる」身体と彼が確信した自己の「寿命の短い」という自己と直接的に関係している死の命題が提示されている。それは実際作者自身が経験していた喘息の発作などの病苦とはつながっているが、このような自己の死という結末が提示されていることを前提

に、二章から自然に自己の現実生活の問題につながっていく構造は「狼疾記」の独特な点である。つまり、「形而上学的」な不安を現実に立脚させるのは「北方行」との最も大きな差異であり、また「狼疾記」の進歩性でもある。

二作の比較について、奥野政元は「『北方行』の伝吉には、この不安を前にしてほとんど全身的な重量と思い入れをかけて表現されているのに、『狼疾記』の三造の不安に至っては、そこにある種の余裕というか、一定の距離を置いて向い合っているところが見られる」、「『北方行』における三造にしても、彼らの不安は、固定観念としての圏にふさわしい命題的な性質が多分に持たされていたのみ、この『狼疾記』に至っては、それが身近かな自己苛責と自嘲に裏付けられることによって、観念的な問題が心情的なものと結合した具体性をもつようになった」という差異と、「狼疾記」の特徴が「普遍よりも個性を注目すること」[15]にあると指摘している。その一方で、三造の絶対的なものに対する恐怖がまだ残っている。孔子の「まだ生を知らず。いづくんぞ死を知らん」の言葉に対し、三造は「未だ死を知らず。いづくんぞ生を知らん」と反論している。つまり、死ということは「狼疾記」では病弱の身による「直接的な死」に具現化されたが、しかし死という絶対的な運命の前にいる三造の恐怖と不安がそんなに大きく変化したわけではない。しかも「抽象的な死」から「直接的な死」までの三造の意識の変化もパスカルの死の哲学からハックスレイの生の哲学への大きな転換を促すにはまだ力不足である。その転換を完成させるのは三造そしてそれ以降の中島文学の主人公の一つの課題になる。

六、絶対という判断標準の崩れ

「狼疾記」では形而上学的な不安が継続している状態、人生の二つの道――出世か享楽か――についての三造の選択が描かれたが、三章では他者としてのM氏が登場し、三造の観察対象となる。このM氏の存在について、奥野政元はM氏「のような人間存在に対する」三造の「驚異」[16]を指摘し、佐々木充は「三造がただちにM氏に化身できるわけではない。しかしその「形而上学的迷蒙」から脱け出すためには、〈生活〉が、〈実践〉が、〈行動〉が必須であることを、三造は示唆されたのである」[17]と述べている。詐欺出版を信じ、「職員室の誰」にも馬鹿にされているM氏は、三造の目には「やり切れない人間喜劇」のように見えていたが、M氏が三造と酒を飲みながらこのような「螺旋階段」の人生論を語った。

人生といふものは、螺旋階段を登つて行くやうなものだ。一つの風景の展望があり、又一廻り上つて行けば再び同じ風景の展望にぶつつかる。最初の風景と二番目のそれとは殆ど同じだが、併し微かながら、第二のそれの方が稍々遠く迄見えるのである。第二の展望に迄達してゐる人間には其の僅かの違ひが解るのだが、未だ第一の場所にゐる人間にはそれが解らない。第二の場所にゐる人間も、自分と全く同じ眺望しかもち得ないと思つてゐるのだ、事実、話す言葉だけを聞いてゐれば、二人の人間に殆ど差異は無いのだから。

この話に対し、三造は「M氏は先刻の感想の中で、明らかに、自分を上の階段まで達してゐるものとし、彼を嘲弄する我々を『下の階段

にゐながら上段にゐる者を哂はうとする身の程知らず』としてゐるに違ひない」と、「我々の価値判断の標準を絶対だと考へるのは、我々の自惚に過ぎないのではないか」と悟ったのである。愚者だと思われる賢者に対する批判がここから見られ、「絶対」という価値判断の標準の正しさが疑われるようになるのは三造にとって大きな進歩だと言えよう。三造はそれまで受容した人類絶滅説や、存在の必然性の理由を探し続けることや、自分自身と他者に対する観察は一面的であり、その基礎には三造の強い主観性が存続しているのである。M氏の話で悟った三造は自己の中の絶対的なものを確立させるという単純な主観的な考え方を一変させ、世間に相対化された人間における欲望について考察しはじめる。

おわりに

M氏の人生論で目覚めた三造の新しい判断基準を以て、人類が亡び、世界が滅亡するような人と世界を全体にし、その全体を絶対的な運命と戦うべき存在であるという認識が根本的に変えられる。それは「狼疾記」五章に書かれた「世俗的な活動力」と「世俗的な欲望」からも窺える。「人生の与へられた事実」を認識できないのに、形而上学的な不安なんかを解決しようがないだろう。つまり、三造の形而上学的な不安と恐怖は実生活などの基礎がなく、空虚な仮説のうえに加えられたねじれた空論である。それに気づいた後に、三造は厳しい自己反省をし、実生活における「活動力」の必要性を知るようになる。

「北方行」から引き継いだ生と死の哲学的な問題に対して、「狼疾記」では死から生への転換が行われている。それに、「狼疾記」の二章から描かれた三造の現実生活にも課題が残っている。それは「名」をめぐる生き方である。父没後、三造は出世と享楽との二つの道を考えた。そして、三造は第二の道を選んだ。しかし、享楽の生活が続いていく中に、「日々の生活の無内容」と「麻痺状態」が訪れる。鷺只雄はこの点について、「生活人としては自己の性情を捨てて、俗物の世界に入って行くことを見定めながら、作家としては逆に自己の性情に執せんとする」[18]と論じている。世間と離れている享楽の道を選んだ三造は実際に「名声地位」を求めようとし、また自分の漢詩が褒められるときに「卑小な喜びにくすぐられ」ていた。これは三造のもう一つの問題点である。すなわち、三造が実際に執着している「名」という「人間的な」欲望と自分の性情との軋轢である。

そして、「狼疾記」にはすでに自分の才能を人に見せるのを憚り、「臆病な自尊心」と「尊大なるべき俺の自尊心」などの心情的な描写が行われ、それがほぼ無修正のままで「山月記」に投入される。この意味において、「狼疾記」までの〈三造もの〉が残した問題点が続いて中国古典のリメイク作に取り入れされ、再検討されるようになるという過程には、〈三造もの〉から「山月記」、「名人伝」のような〈出世もの〉までは、緊密なつながりが存在していると言えよう。

注

(1) 勝又浩「解題　北方行」(『中島敦全集　第二巻』筑摩書房、二〇〇一年一二月)を参考して整理した。
(2) 濱川勝彦「『北方行』と『過去帳』と」(『国語国文』三九巻九号、一九七〇年九月)
(3) 奥野政元「『北方行』の一側面」(『中島敦論考』桜楓社、一九八五年四月)
(4) 川村湊「北方彷徨」(『狼疾正伝　中島敦の文学と生涯』河出書房新社、二〇〇九年六月)
(5) 佐々木充「『北方行』と『過去帳』二篇――懐疑と模索――」(『中島敦の文学』桜楓社、一九七三年六月)

(6) 橋本忠広「中島敦における英文学受容――澤村寅二郎の存在とハックスレイ『対位法』――」(『日本文学』四五号、一九九六年八月)
(7) 橋本忠広「中島敦とハックスレイ――『北方行』と『対位法』について――」(『昭和文学研究』三四号、一九九七年二月)
(8) 本田孔明「断章の誘惑――中島敦『北方行』の位相――」(『立教大学日本文学』七五号、一九九六年一月)
(9) 野田又夫訳『パンセ』(『筑摩世界文学大系　デカルト・パスカル』筑摩書房、一九七一年九月)以下の『パンセ』引用もこれによる。
(10) 橋本正志「中島敦『北方行』の方法――登場人物の言語認識を視座として――」(『阪神近代文学研究』六号、二〇〇五年三月)
(11) 佐々木充「『北方行』と『過去帳』二篇――懐疑と模索――」(『中島敦の文学』桜楓社、一九七三年六月)
(12) 菅野昭正「忘れられた胎児――中島敦『北方行』」(『中島敦研究』筑摩書房、一九七八年一二月)
(13) 渡辺ルリ「1930年北平における不安と模索――中島敦『北方行』論――」(『叙説』三八号、二〇一一年三月)
(14) 郡司勝義「年譜」(『中島敦全集　第三巻』筑摩書房、一九七六年九月)
(15) 奥野政元「中島敦文芸の形成――『過去帳』をめぐって」(『中島敦論考』桜楓社、一九八五年四月)
(16) 註(15)に同じ。
(17) 註(5)に同じ。
(18) 鷺只雄「歌稿と『狼疾記』・『かめれおん日記』」(『中島敦論『狼疾』の方法』有精堂、一九九〇年五月)

付記　ハックスレイ「パスカル」と「北方行」の本文の引用は『中島敦全集　第二巻』(筑摩書房、二〇〇一年一二月)、「狼疾記」の本文の引用は『中島敦全集　第一巻』(筑摩書房、二〇〇一年一〇月)による。

(中国江蘇師範大学外国語学院日本語科講師)